
カガミさんと当たり付きアイス

のりまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カガミさんと当たり付きアイス

【Nコード】

N5021E

【作者名】

のりまき

【あらすじ】

学校のトイレの鏡で『怪談提供室』を開いている“加々見鏡”かがみあきらさんが皆さんにお話する、ちよっとオカルトな話。今回は「当たり付きアイス」の話です。

初めまして、こんにちは。私の名前は、“加々見鏡”かがみあきうと申します。一応、年齢は15歳です。

私は学校で、道端に転がる怪談話を募集している『怪談提供室』なるものを開いているのですが、一度しか、お客さんが来たこと無いのですよ。

ですから、今日もこうして、黒猫の“ヤマト”を隣に置いて、机に肘をかけているのです。

そういえば、皆さんは、知っていますか？ 鏡の中は、案外広いのですよ。だって、皆さんの住んでいる世界と同じ世界が広がっていますからね。

でも、一つだけ違うことがあるのです。映し出すものにも、言葉にも共通することです。

……あら、珍しい、ちょっと失礼しますね。仕事が入りましたよ。

……ふむふむ、中々面白いお話をしてくれました。しかし、提供されたお話をそのまま保管しておくのは勿体無いので。

彼の名前は、“吉住直哉”よしずみなおや。年齢は、私より一つ年下の14歳です。今回の話は、彼の友達“八田俊樹”はったとしきが体験したお話のようです。

強い光を帯びる円は、人々に汗をかかせている。雨も少なく、渴いたコンクリートは、今にもひびが入りそうだ。生き物は皆、のどを潤す飲み物を求めた。

しかし、直哉の友達である俊樹は、飲み物よりも大好きな“アイス”を求めていた。彼が言うには、頭に刺激のくる“あの感覚”がたまらないらしい。それに、“飲む”ことよりも“噛む”ことの方が、彼にとっては、大事だということだ。

ある日の正午。部活も終わり、更衣室で帰り支度をしている直哉に、俊樹が話しかけてきた。

「なあ、帰りに“ばあ”のところ寄って行こうぜ」

“ばあ”とは、駄菓子屋のこと。学校の近くにある古いお店で、お婆さんが、一人で経営しているようだ。生徒たちは、良くそこに駄菓子を買うに行く。

直哉は、財布の中身を気にしながらも返事をして、“ばあ”に行くことになった。

ジワリと肌が焼ける光の下で、二人は、“ばあ”にたどり着いた。屋根から作られた影に招かれて、二人は店の中へと入っていく。店の中は、幾つもの箱や丸くて赤いフタのついたケースが、棚にびっしりと詰められて、入り口近くにある傘立には、玩具が入り混じり、くすんだ壁には、折り紙などがつるされている。そして、高台の上に寂しく置かれたレジの隣には、沢山のアイスが入ったケースが置いてあった。

直哉は、あれこれと目をつけていたが、俊樹は真っ先にアイスに入ったケースに向かった。

適当なものを取ってから直哉は、俊樹のところへ歩み寄る。俊樹は、曇ったケースのフタを手で擦り、中を覗いた。ふと何かを見つけたようで、勢い良くふたを開けて、アイスを取り出した。

「見るよ、直哉。“ガリガリ君”のコーラ味だぜ。しかも、最後の

一本！」

満面の笑みを浮かべる俊樹に直哉は、指を鳴らして、舌打ちをした。それから、仕方なしに、ソーダ味を手取る。

「なあ、俊樹は、それだけ？」

「え、そうだけど？ まあ、いいじゃん。早く会計済まして、食べようぜ！ 溶けちまうよ」

俊樹は、せつせとレジに向かい、お婆さんにお金を渡した。それに続き、直哉も財布からお金を取り出し、お婆さんに渡す。

入り口を出て、屋根の下にある幅の狭いベンチに座り、“ガリガリ君”を食べ始めた。

「なあなあ、コーラ味はどう？」

直哉が訊くと、俊樹は見せびらかすように、ゆっくりとアイス舐めた。それを見せられた直哉は、顔を顰めるが、俊哉は、頭を叩いて刺激を楽しんでいた。

直哉がアイスを食べ終えて、他のお菓子に手を出し始めると、半分食べたかどうかのところで、俊樹が、歓声を上げた。

「み、みみ、見ろよ、直哉！ 『当たり前』だ！ 『当たり前』がでたぞ！」

直哉も一緒に喜んで、顔を緩ませた。

俊樹は、お婆さんにもう一本もらう為に、アイスにかぶりついた。俊樹の歯によって噛み砕かれた“ガリガリ君”の氷の粒たちは、の

どを通して、溶けていく。

はしゃいだまま駄菓子屋の中へと入っていき、当たり前棒は、新たな“ガリガリ君”のコーラ味となつて帰ってきた。

直哉が、“よっちゃんイカ”を味わつて食べていると、またしても歓声を上げる俊樹。

何度も頭を叩いて、刺激を楽しみ、二本目を食べ終えた。そしてまた、駄菓子屋の中へと入っていく。

その時、直哉は、自分の食べた“ガリガリ君”の棒を道端へと投げ捨て、ため息をついた。

そんな様子も気にせずに、俊樹は、新たな“ガリガリ君”のコーラ味を片手に、はしゃいでベンチに座り込んだ。

まだ、食べてもいないのに頭を叩いて、思わず、笑みをこぼしている。

直哉が、買った駄菓子全てを食べ終える頃に、三本目を食べ終えた俊樹が、棒を揺らして、駄菓子屋のほうへと入っていった。

そして、また“ガリガリ君”のコーラ味。食べては中に入り、食べては中に入りを繰り返す俊樹は、それが当たり前のように思っているようだ。

十三本目で初めて、直哉が疑問に思う。いや、『当たり前』が続くことは、三本目の辺りから疑問に思っていたけど、そんなことはない。

最初は、たった一本だったはずの“コーラ味”……。なのに次から次へと出てくる。これは可笑しいと思った直哉は、十三本目を食べ終えた俊樹の代わりに、新しいアイスに変えてもらうため、駄菓子屋へと入っていった。

それから、お婆さんに棒を預けると、お婆さんは、薄ら笑いを浮かべながら“それ”を後ろに回して、逆の手で後ろから新しいアイスを取り出した。

それを預かり、首をかしげながらも駄菓子屋を出ると、俊樹が凄
い形相で、アイス奪った。

その光景に怖さを覚えた直哉は、帰るよつに俊樹を促すが、逆に
帰れと言わんばかりに、睨みつけられてしまった。

それから、無言で家に帰るが、それから二日間、俊樹は、駄菓子
屋の前でアイスを頬張り、今も尚、親を無視して、アイスを頬張っ
ているらしい。

これで、直哉さんから聞いたお話はお仕舞いです。長々と聞
いてくれましてありがとうございます。

では、これにて、今日の『怪談提供室』は、終了します。

あ、非常に言い難いのですが、これは“本当”の話です。
では、さようなら。

（後書き）

読んで下さいまして、ありがとうございます。
感想などをくれましたらうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5021e/>

カガミさんと当たり付きアイス

2010年10月11日09時02分発行